

体験参加型の訪問講座で見られた福祉に対する意識の変容

吉 澤 恵 子

要 旨

長野県では、県民に福祉・介護の仕事の現状や魅力を伝えるため、「福祉を学ぼう」と題して、学校や職場などに講師を派遣し、講義や実際の仕事のミニ体験を実施している。それらの取組は、社会福祉法人長野県社会福祉協議会が主体となり、学校の授業や課外活動、職場内研修、地域活動等で活用されている。

今回、Y中学校より「福祉・介護について学びたい」と訪問講座の依頼が、長野県社会福祉協議会にあり本学が担当することになった。

視覚障害や身体機能の低下などを体感することで、障がい者や高齢者の方の心理的、身体的な状態を想像し、当事者の気持ちをくみ取り、これからのよりよい関わりにつなげることを目指した。

講義だけでなく、体験参加型の講座を中心に、アイマスクや体験セットを用いて2人1組で障がい者や高齢者及び介助者の疑似体験ができるようにした。その際、用具を工夫し、できるだけ日常の生活動作を実際に行えるような場を設定した。

受講後、生徒のアンケート結果を考察し、体験を通して福祉・介護に対する意識の変容が認められた。

キーワード：福祉を学ぶ、体験参加型、用具の工夫、福祉・介護に対する意識、行動変容

はじめに

これからますます高齢者の割合が増えていく状況にある。高齢者に対する福祉や介護、保健予防活動の重要性がますます叫ばれている。

今まで保健予防活動の一環として、地域住民を対象にして幅広い年代に健康教育等を実施してきた。実施に際しては、「参加者（対象者）または主催者側のニーズに沿った内容になっているか」、「話す側として、きちんとした知識の普及や啓発が行えているか」、また、テーマにもよるが「今後の生活の中で何かしらの行動変容につながっていられるように」ということを考え、実践してきた。

そんな中、県が取り組んでいる訪問講座に中学校より「福祉について学びたい」との依頼があった。

次世代を担う中学生が、高齢者や福祉についてどのような考えをもち、講座の体験活動を通して、どのように感じ考えを変容させていくのか、実施後のアンケートの結果（76人、回収率95％）を考察し、今後の実践に役立てたい。

1 講座の概要

対象者ニーズの把握及び講座テーマの決定

受講対象者は中学校2年生80名（2クラス）。

訪問先の中学校教諭から以下の依頼があった。

「ほとんどの生徒が、祖父母や高齢者と暮らしていない。今年度、職業体験において全員が通所サービスに行きたいと考えている。今までは保育園での体験などを行っている。そこで、今回、高齢者の方への基本的なかかわり方や福祉に関心を持てる学びの機会を得たい。可能であれば、福祉体験も希望したい。体験はできる限り少人数のグループでできるようにしたい。」

それを受け、今後の生活の中で何かしらの行動変容につながっていられるようにと、長野県社会福祉協議会の担当者と相談し、テーマ「福祉を学ぼう」と題して、体験参加型の講座を開催することとした。「将来こうなりたくない」という感情だけで終わらせないように、授業の組立を考えた。

以下、講座の概要及び学習の様子を示す。

(1) 目標

- ① “障がい”の考え方と、高齢者や障がい者の方への関わり方について知る。（知識の習得）
- ② 身体機能の低下等を体感することで、高齢者や障がい者の方の心理的、身体的な状態を想像し、当事者の気持ちをくみ取るための一助とする。また、体験を通して介助される側、介助する側にもそれぞれ感じる可能性があることに気づく。（体験学習）
- ③ 知識と体験から“福祉”という視点で、今後の生活の中で行動変容¹⁾に結び付けられるよう振り返る。

これらを通して、今後の職業体験にも生かせるものであることを目標とした。

(2) 活動内容

1クラス40名（男女各20名）

	活動内容	時間
1 限目	<p>① 講義</p> <p>テーマ：福祉を学ぼう ～福祉の視点を学ぶ～</p> <ul style="list-style-type: none">・日本の現在と将来の人口推移から見えること・障がいについて考える（ノーマライゼーション）・日常生活で支援を必要としている人とは？・支援（介護）で重要なこと・関わり方のポイント1²⁾ （ユマニチュードを中心に）・“きく”（聞く、訊く、聴く）について…共感的な関り・関わり方のポイント2 生活に対する意識の違い³⁾ （これまでに重要な意味をもつ“高齢者”）・地域の中の支援について・地域の中の関わる人々 （多職種連携について）	30分 パワーポイント使用

	<p>② 体験しよう！その1 車いす体験²⁾ 2人1組（1人乗車、1人介助） 1階校舎を1周…坂や段差の活用</p> <p>③ 2限目の体験についての概要説明</p>	30分
2 限目	<p>① 体験の説明とテーマ5に関連する誤嚥について</p> <p>② 体験しよう！その2 5グループに分かれて体験 （1G8人・2人1組で実施） テーマ1：視覚障害を体験 テーマ2：下肢の筋力低下を感じる テーマ3：関節の動きの制限を感じる テーマ4：聞こえの悪さと指先の感覚低下を感じる（コミュニケーション） テーマ5：食事介助 ～飲み物にとろみをつけて～</p> <p>③ まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体験を通しての振り返り ・アンケート記入 	<p>5 分 動画 45分</p> <p>10分</p>

会場：教室、講義室とその廊下や階段。

＜体験しよう！その2で使った用具＞

テーマ1：視覚障害ゴーグル、アイマスク、白杖

テーマ2：重りバンド（腕、足首）、重りサンダル

テーマ3：杖、ひじ・ひざサポーター、重り付ベスト（重りは約1kg）

テーマ4：イヤーマフ、軍手

テーマ5：お茶、ジュース、市販のとろみ剤

※テーマ1のアイマスク、白杖及びテーマ5以外は、
高齢者疑似体験セット（中学生から成人向け）を
使用した。

(3) 体験学習の様子

〔体験しよう！その1〕



写真1 車いす体験

「段差怖いね」

「ゆっくり押すよ」

〔体験しよう！その2〕



写真 2

テーマ2：下肢に重りバンドをつけて、重りサンダルに履き替えている様子



写真 3

テーマ 2：階段を昇る様子

「足が重い」

「手すりがあると助かるな」



写真 4

テーマ 4：指先の感覚低下

財布からコインを取り出し、自動販売機でペアの人の飲みたい物の金額分コインを投入して購入する。その後、ペットボトルの蓋を開ける。



写真 5 テーマ 5：食事介助（とろみをつけて）

2 アンケート結果及び考察

アンケートは、長野県社会福祉協議会が作成したものを活用し、76人（男性38人、女性35人、性別未記入3人）の集計結果をもとに、福祉や介護についての考え方や、講座の体験活動を通じて、障がい者や高齢者に対してどのように感じ考えを変容させていったのかについて考察する。

特に、集計の数値だけではなくアンケート用紙最後の質問項目『講座を受講しての感想や要望等をお書きください』（以下『感想や要望』と記す）の自由記載についても、率直に生徒の学んだことや、今後の行動変容につながるものを明確にとらえるため、重要な要素として取り上げる。

(1) 質問「福祉の職場・仕事について」

ア理解できた34人（45%）、イある程度理解できた42人（55%）。ウあまり理解できなかった、エ理解できなかったという回答はなかった。

- ・福祉と聞くと、とても難しく自分とは離れた言葉だと思っていた。しかし、高齢者が増加する今、その人たちを支えるのは私たちだと改めて感じ、自分が思っている以上に身近なことだと気づいた。
- ・これまであまり気にかけてこなかったけれど、いろいろな所で福祉のために働いている人がいるんだなあと思った。
- ・今後高齢者はとても増えていくので、介護福祉の仕事はこれからは必要になると感じました。
- ・福祉や介護は今までよく分からなかったけど、講座を受けて理解を深められたので良かったです。しかし、少し難しいなあとも感じました。
- ・今まで福祉の仕事は大変でキツイ仕事だと思っていたけれど、お話を聞いて人と人との関わりの深い職業なんだと思った。
- ・「ヘルパー」などの言葉は知っていたけれど、実際にやっていることは知らなくて驚きが沢山あった。
- ・家族も福祉の職場にいるけど、全く何も知らなかった。今日で多くのことを学べたので良かった。
- ・今まで介護の仕事については、あまり知識がなかったのですが、今回の講座で知識を広められたので良かったと思います。

講義の中に、福祉の職場や仕事について具体的に入れることはできなかった。しかし、“福祉”に関わる職種（多職種連携）及び職業体験を考え、介護保険で給付されるサービス及び要介護者への様々なサービスについて触ることができた。『感想や要望』では、生徒の声から福祉や介護の仕事などに関心を示し、その仕事の大切さなどの理解を示してくれていることが分かる。

(2) 質問「福祉に対するイメージについて」

① 講座受講前

ア良いイメージだった59人（77.6%）、イ悪いイメージだった8人（10.5%）、ウ興味・関心がなかった9人（11.9%）だった。（図1）

ア良いイメージだった人は、男女とも多かった。2番目に多かったのは、男性では、ウの興味、関心がなかった7人（18.4%）、女性では、イ悪いイメージだった6人（17.1%）で、男女

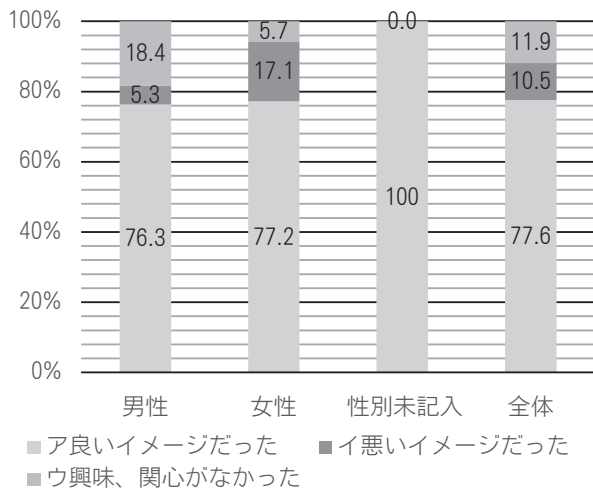


図1 福祉に対するイメージについて

に違いがみられた。

この違いは、男性では身近に福祉や介護に関わっている人がいない、若しくはいても身近に関心を示す機会がなかったのではないかと、女性では大変だ、きついなどのイメージがあるのかもしれない。

イと回答した1人の生徒の『感想や要望』に、「すごく大変そうだし、疲れそうだし、ストレスがたまりそうだけど、車いすや食事などをし、少し興味が持てた気がする。将来こんな生活をするのかと思うと少し心配だった。」と書いてあった。

② 講座受講後（イメージの変化）

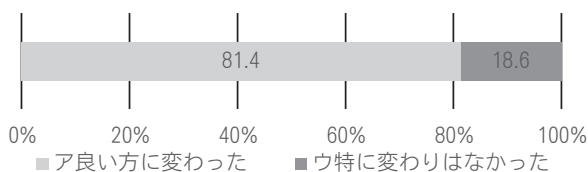


図2 福祉に対するイメージ「ア良いイメージだった」人（59人）の意識の変化

「福祉に対するイメージについて」の①講座受講前で、ア良いイメージだった59人の講座後の意識の変化では、ア良い方に変わったが一番多く48人（81.4%）、次いでウ特に変わりはなかった11人（18.6%）は良いイメージのままで、イ悪い方に変わったはいなかった。（図2）

表1 イ悪いイメージだったとウ興味・関心がなかった生徒の受講後の福祉に対するイメージの変化について

	ア良い方に変わった	ウ特に変わりはなかった
イ悪いイメージだった	87.5%（7人）	12.5%（1人）
ウ興味・関心がなかった	88.9%（8人）	11.1%（1人）

イ悪いイメージだった8人とウ興味・関心がなかった9人の変化は、イ・ウと回答した人の約9割がア良い方に変わった。（イ7人87.5%、ウ8人88.9%）ア良いイメージだった人と同様に、イ悪い方に変わったはいなかった。（表1）

ウ興味・関心がなかったと回答し、講座後もウ特に変わりはなかった1人は、感想等の記載はなかった。しかし、「今後の進路選択をする上で参考になりましたか」という問いに、『福祉は困っている人を助けられるから』と記載があり、職業選択についての問いでは、“進路選択の1つとして選択肢に入れていきたいと思った”に回答があった。

悪いイメージを変えることができない生徒もいた。講義や体験後の振り返りの時間においてイメージを変えた他の生徒の感想に触れる場をもつことや具体的な内容を語り合う場をとることが重要であると考え。

その点もきちんと視野に入れながら、依頼された教諭と、講座の前と後をどのようにつながか等共有できるように工夫する必要があると感じる。

(3) 体験について

体験については、テーマ毎『感想や要望』に記載された内容から考察する。

① 体験しよう！その1 車いす体験（2人1組）

- ・一番怖かったのは車いすに乗っているときの段差。ぐわんと持ち上がる感じがびっくりしました。でも、その体験がとてもいい体験になりました。

- 車いすに乗ってみて、はじめて乗っている人の気持ちが分かった。段差のところが少し怖かった。話にもあったように、相手との信頼関係が必要だと思った。
- 車いすがすごく工夫されて作られていることに驚いた。実際に乗ってみるとスピードが出るように感じられて少し怖かった。
- 車いすに乗った時にパートナーの人の声かけがとても安心できた。
- 車いすの人を見かけて（困っていたら）助けあげたいと思った。

生徒の感想から、介助する側も声のかけ方や車いすの持ち上げ方など緊張しながら取り組んでいる様子うかがえる。

校舎内の坂道に見立てた少し傾斜のある廊下や移動しにくいマット上、少しの段差などを車いすで通るコースとした。また、実際に車いすを利用している県社会福祉協議会の担当者より「信頼関係が大切」と教えていただき、移動に際しての安全確認や目線の高さ、声かけの仕方なども事前に説明した。体験を通して、介助にあたり丁寧に声をかけたり、車いすを急に傾けないようにしたりするなど、緊張しながらも慎重に行動しようとする姿勢につながったのではないかと考える。また、困っている人がいたら助けたいと、実際の行動へとつながる姿勢も感じられた。

② 体験しよう！その2

テーマ1 視覚障害の体験

- 自分が白杖をついている人などを見かけたら、今日の体験したことを思い出して、（困っていたら）介助したい。助けようと思う。
- 目が見えないと一人では身動きがとれないので、介護者やバリアフリーの大切さが分かった。
- アイマスクをつけて歩いた時、まわりが見えない状態で1本の杖を頼りに歩くのは大変だと思った。
- 生活のしにくさを感じた。体の不自由な人に寄り添ってあげることが大切だと思った。

- 視覚障害ゴーグルをつけて視覚の変化では、いろいろな輪郭がぼやけて見えて文字もかなり近くまでよらないと読めなくて不便だった。
- 実際に体験してみるとことによって、高齢者の方たちは、こんな風に見て、動いていたと理解できました。

生徒の感想から、目が見えない人の感じ方や困り感、高齢者の人はこんな風に見てえていたのかなど、介助する人と介助される人のそれぞれの立場から、実感を伴って理解することができたことがうかがえる。アイマスクと杖を使っている歩行の際には、教室内の机や椅子を利用して障害物を作るなどの工夫をした。また、視野狭窄のアイマスク使用時には、新聞や雑誌などを読むようにした。

テーマ2 下肢の筋力低下を感じるとテーマ3 関節の動きの制限を感じる体験

- 足に重りを付けて歩いた時、思っていたよりも歩きづらくて大変だった。
- 足に重りを付けて階段を上がった時、とても歩きにくかった。そういうことを分かってあげて助けてあげたい。
- 関節の可動域を制限した時も、車いすに乗った時もパートナーの人の声かけがとても安心できた。

テーマ2では、足首に高齢者疑似体験セットの重りを付け、重り付きサンダルで階段を昇降した。テーマ3では、ひじ、ひざサポーターと手や足首の重りバンドを装着し、階段の昇降の体験とした。

階段の昇降は、日常生活では当たり前の行動だが、実際に関節の可動域の制限により歩きにくさや足が上がらず些細なところでつまずきやすくなる感覚を体験し、その大変さが感じられた。

ちょっとしたつまずきから転倒して骨折、寝たきりという状態になりうることを実感して理解するために、高齢者疑似体験セットは有効である。

テーマ4 聞こえの悪さと指先の感覚低下を感じる (コミュニケーション) 体験

- 指先の感覚が低下すると、小銭をもらったり自動販売機に入れたりすることすら、困難になることが初めてやってみて分かった。
- 高齢者の方の感覚を体験して、こういう風に感じて過ごしているんだなあと分かった。高齢者の方の気持ちがこれからは分かるかもしれない。
- 体験中に、「コイン探せない」。お財布の中が見えない、コインをつかめない……。

生徒の感想から、視覚変化と指先の感覚低下に加え、拘縮や振戦などがあると、お財布から小銭が取り出しにくく、自動販売機のコインの投入口(一文字型)にも入れられない、投入に時間がかかってしまうことも実感できた様子がうかがえる。

用具には、高齢者疑似体験セットの体験用手袋か、ビニール手袋と軍手を重ねたものを使用し、コインの掴みにくさを感じられるようにした。

学校には自動販売機の設置はないため、段ボールで製作。一般的な自動販売機のコイン投入口の高さと同じような位置になるよう机の上に立てた。また、料金の異なる5～6種類の飲み物を設定した。



写真6

以下のように、できるだけ普段と同じような手順で自動販売機の飲み物を購入するようにした。

- ① ペアの人の購入したい飲み物を聞く。
- ② お財布から必要な枚数のコインを出し、自動販売機に投入する。
- ③ 財布からお金に見立てたコインを取り出す。
☆財布(がま口タイプ、二つ折り財布、長財布など数種類から選択)
☆コイン(1円5枚、5円2枚、10円3枚、50円1枚、100円1枚、500円1枚 計13枚)
- ④ 自動販売機コイン投入口(横一の形)に、購入するのに必要なコインを投入する。
- ⑤ 飲み物のボタンを押す。
- ⑥ 机に置いてあるペットボトルの蓋を開け、相手に渡す。

最後の感想を書いた生徒は、最終的に一番大きなコイン500円を出し、小銭が出せないのでおつりをもらうことを考えた。体験を通じて、生徒自身が様々な工夫も考えている様子が見られた。

最近では、コインの投入口も幅広い受け皿のある投入口(投げ入れ型のもの)も増えていることの必要性が自然と理解できたようだ。

- 実際に高齢者の不自由なところをいろいろ体験出来たので、大変さがよくわかりました。高齢者の方がそのことで困っていたら手伝ってあげたいと思いました。

3 おわりに

日常生活動作をできる限りイメージした体験内容を取り入れて、場面設定や教材・使用する用具を考えた。その結果、『感想・要望』には「高齢者になりたくない、年をとりたくないと思っていたけれど、現在は介護や支援をされる側、する側も生活しやすいくみや機能ができていて、『すごく大変』なものではないと感じた。障がい者と接すると、『介護や支援をしてあげる』という上に立ったような感覚

になってしまうけれど、同じ目線になって尊敬し合うことが大切だと分かった。」「体験してみて、年をとったりすると体が自由に動かなくなることを知った。想像以上だった。だから、祖母とかが重い荷物を持ち上げられないことがよく分かった」など体験したことで福祉・介護の意識⁵⁾が変わったという内容が57人からあった。今後の生活の中で、何かしらの行動変容につながっていかれるのではないかと、期待できる。

講座がきっかけで、少しでも福祉や介護など身の回りの問題に関心を持ってもらえたらうれしい。自分も実践の力をさらにつけていきたい。

参考文献

- 1) 厚生労働省：健診・保健指導の研修ガイドライン（平成30年4月版）
- 2) ジネスト・マレスコッティ研究所日本支部著書、ユマニチュード研修 テキスト
- 3) 新・介護福祉士養成講座 第12巻 認知症の理解、介護福祉士養成講座編集委員会編集、中央法規
- 4) 新・介護福祉士養成講座 第7巻 生活支援技術Ⅱ、介護福祉士養成講座編集委員会編集、中央法規
- 5) 臨床心理士を基本から学ぶ 丸島礼子・日比野英子編著（株）北大路書房

<参考資料> 福祉を学ぼう（訪問講座）コースの概要

	コ ー ス	内 容
A	福祉ってなに？ （体験談など） 福祉を知りたい方向け	福祉の利用者と介助者がペアで講師となり、スポーツやアート、お菓子作り等の体験談を交えて、福祉について分かりやすくお伝えします。
B	福祉の仕事を学ぶ （講義、映像など） 福祉の仕事に関心のある方向け	介護福祉士養成校の教員等が、福祉の職場ややりがい、資格の種類・取得方法等についてお伝えします。
C	福祉の仕事 ミニ体験 （ふくしニア） 福祉の仕事を楽しく体験したい方向け	様々な職種のユニフォームを着て、福祉の仕事を実際に体験できます。 例：車いす介助（介護福祉士）、血圧測定（看護師）、きざみ食（栄養士）等

（長野県ホームページより）